

〔小笠原諸島自生種による植生回復技術の開発〕

苗木生産技術の開発

～シャリンバイおよびハウオウボクの肥培管理試験～

宗 芳光

(小笠原農セ)

【要 約】シャリンバイおよびハウオウボクは、180 日タイプの被覆燐硝安加里を 3 g/ℓで施用すると生長が優れ、苗木を効率的に栽培できる。

【目 的】

東京都や小笠原村では 2011 年の世界自然遺産への登録を目指し、島内の植生回復や町並み等景観向上を図っている。小笠原諸島の森林の構成種であるシャリンバイおよび街路樹で要望があるハウオウボクを対象に肥培管理試験を行い、苗木を効率的に栽培する技術を確立し、生産者に普及する。

【方 法】

2006 年に発芽したシャリンバイ（バラ科）の実生苗を 2008 年 12 月 5 日に 5 号鉢から 7 号鉢(5.3ℓ)へ、さらに 2009 年 12 月 8 日に 9 号鉢(13.3ℓ)に鉢上げし、鉄骨ハウスで育苗した。2005 年に発芽したハウオウボク（ジャケツイバラ科）の実生苗を 2008 年 12 月 5 日に 3 号鉢から 5 号鉢(1.7ℓ)に、さらに 2009 年 12 月 8 日に 7 号鉢(5.3ℓ)へ鉢上げし、鉄骨ハウスで育苗した。用土は農業センター内で採取した赤色土を用いた。肥料は 180 日タイプの被覆燐硝安加里(N-P₂O₅-K₂O=14-12-14)、400 日タイプの被覆尿素(N-P₂O₅-K₂O=41-0-0)、700 日タイプの被覆尿素(N-P₂O₅-K₂O=41-0-0)を用いた(表 1)。灌水頻度は夏期は 3 回/週、それ以外は 2 回/週とした。各区 5 株とし、調査項目は樹高および地際部の樹径とした。

【成果の概要】

1. シャリンバイ：季節に関係なく、樹高および樹径は生長した。最も生長が優れた 180 日タイプの 3 g/ℓ区および 6 g/ℓ区では、樹高は試験開始から 1 年後に 2 倍の 2 m、2 年後に 3 倍の 3 m に、樹径は 2 倍の 1.4cm 以上となる。
2. ハウオウボク：樹高は春期と夏期に生長し、冬期に生長が鈍化した。樹高が最も生長した 180 日タイプの 3 g/ℓ区および 6 g/ℓ区では、試験開始から 1 年後に 4 倍の 2 m、2 年後に 7 倍の 3.5m になる。また、樹径が最も生長した 180 日タイプの 3 g/ℓ区および 6 g/ℓ区、700 日タイプの 2 g/ℓ区では、試験開始から 2 年後に 2 倍の 3.5cm になる。
3. まとめ：両樹種ともに経済性および生長量を考慮すると 180 日タイプの被覆燐硝安加里を 3 g/ℓ施用した区が優れ、試験開始から 1 年後には樹高が 2 m となり出荷が可能である。また、栽培期間中の病害虫の発生はみられない。来年度は、植生回復および街路樹に適している小笠原固有種のノヤシ（ヤシ科）の肥培管理試験を行い、栽培技術を確立する。

表1 肥料の種類, 施肥量および成分量

肥料の種類	溶出日数	成分 (N-P ₂ O ₅ -K ₂ O)	施肥量 (g/l)	N (g/l)	P ₂ O ₅ (g/l)	K ₂ O (g/l)
被覆燐硝安加里	180日 ^a	14-12-14	0	0.00	0.00	0.00
			3	0.42	0.36	0.42
			6	0.84	0.72	0.84
			9	1.26	1.08	1.26
被覆尿素	400日 ^b	41-0-0	2 ^d	0.82	0.00	0.00
被覆尿素	700日 ^c	41-0-0	2 ^d	0.82	0.00	0.00

- a) 肥料を2008/12/5, 2009/5/29, 2009/12/9に施用した。
 b) 肥料を2008/12/5, 2009/12/9に施用した。
 c) 肥料を2008/12/5に施用した。
 d) 窒素量を180日タイプの6g/l区と同程度の量にして施用した。

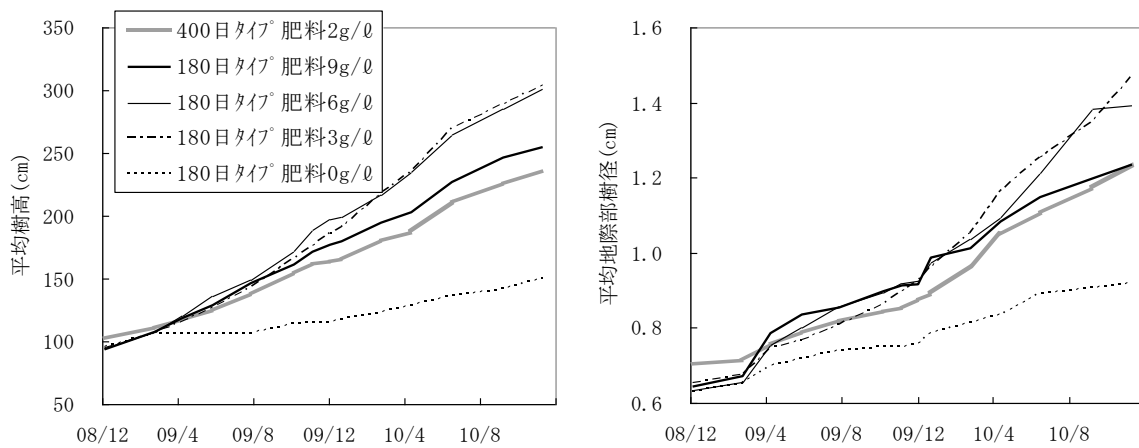


図1 赤色土で鉢栽培したシャリンバイの樹高および樹径

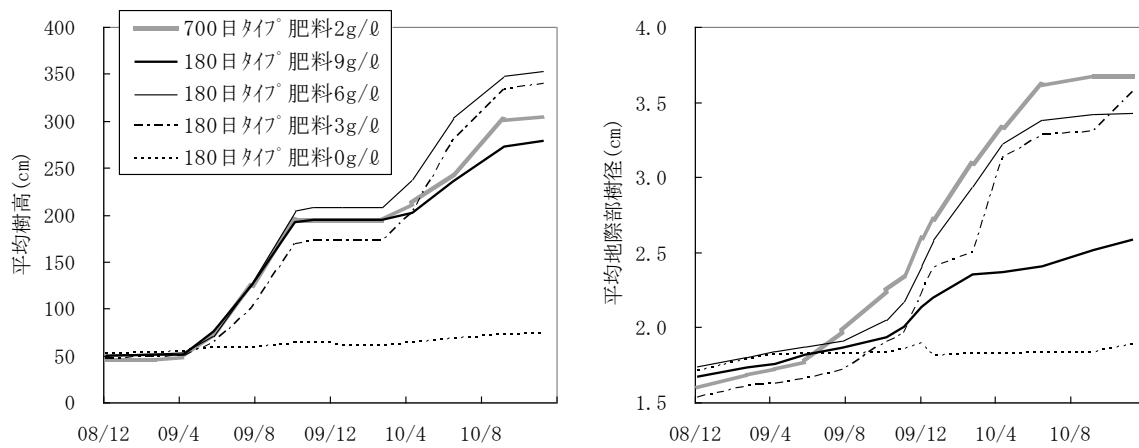


図2 赤色土で鉢栽培したハウオウボクの樹高および樹径